

労働価値説の現代的意義

深 澤 竜 人

はじめに

筆者は労働価値説の現代的な意義の追究、これを自身の研究対象課題として取り組んできた。それを考察すべく、学説史の研究分野では労働価値説の源流にまで遡り、労働価値説の学説的な推移と展開過程を確認してきた。計量分析の面では投下労働量分析の発展と展開として、日本経済における労働価値説の実証データとなる、必要労働量・剰余労働量・剰余価値率、これらの実証分析を手がけてきた。（労働価値説に関する筆者の一連の論稿は、末尾の「参考文献」を参照。）

本稿はそれらの研究・考察、あるいはまた筆者が行なっている実践活動から得られた、労働価値説の現代的意義の提示である。（労働価値説に関する筆者の実践活動については、深澤〔2022〕を参照。）

1. 労働価値説の理解把握

労働価値説の現代的意義を再考するにあたって、最初に労働価値説に関して正確な理解と把握がとりまなおさず必要と考える。あるいは労働価値説に関するおかしな誤解を払拭すべきである。本節はこのことから始めていく。

「労働価値説」に関してまず辞書的な説明から確認すべく、ある辞書を紐解くと、「商品の価値はその商品を生産するために必要とされた労働によって規定されるとし、これによって経済全体を規定するという価値学説⁽¹⁾」とある。またインターネット上で代表的なフリー百科事典「ウィキペディア」では、「人間の労働が価値を生み、労働が商品の価値を決めるという理論。アダム・スミス、デヴィッド・リカードを中心とする古典派経済学の基本理論として発展し、カール・マルクスに受け継がれた⁽²⁾」とある。

労働価値説のこのような把握説明について、筆者・深澤は既に異論がある。あるいはこうした把握説明・定義は労働価値説を誤解しているものであって、また読者におかしな理解を与えるものだと考える。特に、「商品の価値は労働によって規定される」「労働が商品の価値を決める」というくだりについては、そうではないという見解を持つ（以下で詳述）。また「経済全体を規定するという価値学説」というくだりは、何を言わんとしているのか理解に苦しむ。

筆者・深澤は労働価値説を以下のように捉えている。あるいはまた、以下のような事実認識や公理（公に認められる自明の理）から、労働価値説は次のように認識把握されるべきだと考えている。その点について、筆者の今までの考察と論稿そして実践活動などから得られた省察も含めて、重要な論点を加筆しながら以下論じていく。

1-1. 人間による労働の意義、個の生活や社会の維持・存続

人間に限らず広く動物界という範囲・領域で考えてみても、動物は様々なものを消費することによって命を繋いでいる。ただし動物の中でも人間は、その消費するもの、特に衣食住など生活に必要な

ものを、太古から自然に働きかけて自らの手で生産することができている。これは人類を他の動物界から区別させる一つの指標でもある。

このような人間が行なう、自然に働きかけて自らの手で生活に必要なもの等々を生産していく活動や行為、それらは労働の顕著な例である。この能力は上記のように一般に人間だけが所持しているのであって、人間が行なうこの労働という能力を通じて行なう生産活動、これによって我々人間にとって必要にして様々なものが生み出されていく。そして繰り返すが、それを消費することによって我々人間は命を繋ぐことができ、それによって生活を営むことができている。あるいは逆に言って、人間はそうしなければ生活に必要なものを獲得することはできない。(労働とはこうした生産活動のみを言うのではなくて、生産活動以外の労働も無論ある。そうした生産活動以外の労働も人間が行なう労働活動・労働行為に含まれるのだが、生産活動という労働が典型的であって理解しやすいため、本稿ではそれにて論を進めていく。)

人間の生活に必要なものの一部は、例えば空気や太陽光など天然・自然に所与として存在するものもある。それらは労働や生産などを行わずに自然に手に入る。しかし、多くのものは上記のように労働という生産活動を通じて生み出され、獲得していかなければならない。天然に存在する財であっても、自然に入手・摂取できないとすれば、採取活動という労働行為によって獲得することとなる。

また労働による人間の生産活動は、一個人あるいは一家族という範囲だけではなく、それ以外に大なり小なり形成されていく一つの社会をも維持していく。と言うのも、労働という生産活動は、一個人の消費生活に必要なものだけでなく、社会という集団に必要なもの、そしてその形成と維持に必要なものを生み出している。であるから、労働によって社会が維持され再生産されているというのは、こうした意味からも言えるわけである。

このように、我々個人が生活必需品を消費していく私的生活、あるいは集団による社会的生活においても、そこで必要とされるものの多くは、労働による生産活動によって生み出されているのであって、さらにはそれによって同時に一つの社会が維持され再生産されている。逆に表現して、我々人間にとって生産されたものがなければ、我々は消費することはできないし、また社会も維持・再生産されていかないのである。こうした観点に立つと、我々人間の生活維持にとっては、労働による生産が根本・本来的に絶対に必要である。その生産活動が基盤となって、これによって社会が維持されて存続できているのである。

以上ここまですべてを概観するだけでも、労働と生産活動に関する崇高なる意義が見て取れる。人間だけが持つ、そして他の動物と区別される秀でた活動や行為、つまり労働、これによって自らとそして他者・社会にとって必要とされる価値あるもの（以下具体的・典型的に「生活必需品等々」としていく）が生み出されていくということ。それによって社会が支えられ維持されていくということ。その根底には人間の労働によって、我々の生活維持に必要なもの、いわば生活必需品等々の価値あるもの（使用価値・交換価値いずれも含める、以下同じ）が年々歳々生み出されていたからということ。このように労働による生産活動こそが、上記の諸々をいわば創造し維持しているのである。需要や消費の果たす役割は、それらを望み、そしてそれを消費していくにすぎず、実際に主体的に能動的に創造し生み出しているのは人間の労働による生産活動である。

以上見てきたとおり、このように人間が行なう生産活動つまり労働によって、我々人間にとって生活必需品等々いわば価値あるものが生み出され、それによって社会が維持されていくということ、これらは歴然とした事実であり、また自明の理であるとも言えよう。冒頭示した労働価値説の前提となる公理的把握という筆者の主張、その一部は、これらの見解や事実認識に基づくものである。これらを了承し

た上でさらに、以下の提示と展開とを加えていく。それによって労働価値説への理解が改めて得られると考える。

1-2. 生産過程、人と物との区別、労働による価値増殖

このように人間が行なう生産活動の重要性、そしてその際に行なわれる人間の労働に第一義的な意義を見た。労働によって我々人間にとって生活必需品等々いわば価値あるものが生み出されているという歴然とした事実、これを自明の理として首肯してもらえたとすれば、次にはさらに具体的に労働を通じて生産を行なう過程（生産過程）、これをここで考えていきたい。生産を行なう生産過程では、物としての物的要素に該当する生産手段（原材料などの労働対象、機械などの労働手段）と、人という人的要素に該当する労働力、この二つが必要である。このように生産要素・生産資源を、人と物といった二分割の区分で認識・把握していくこととする。

この生産要素・生産資源と生産過程に関して、上記1-1の観点から展開し確認・認識していくと、生産過程で人的資源・要素にあたる労働力こそが能動的な役割を果している。またそうした機能を有しているのである。と言うのも、人間の労働に対して、機械や原材料などの生産手段は物であって、生産過程で人間の手が加わらなければ基本的に稼働せず、また形態変化もしない。自然現象的に変化・発展していくことはあっても、放置すれば劣化していくだけである。我々人間が必要とする生活必需品等々を、確実に消費なり使用に足りうるものとして仕上げ維持し管理していくのは、物としての物的要素ではなく、人間の労働であって、上記の人的資源・要素にあたる労働力、こちらの方が行なっているわけである。つまり生活必需品等々を生み出していく生産過程において、人的要素に該当する労働力こそが能動的かつ積極的に労働や生産の能力を具備していて、そして実際にそれを果しているのである。こうした創造的にして有意義的な機能を果たしていたのは、唯一人間のなせる業として、究極的には人間の労働こそが所持している能力であった。これらは上記1-1でも確認してきたとおりである。

つまりあたりまえの話として繰り返すが、人的資源・要素にあたる労働力の方が、生産過程で労働や生産活動を行なっているのである。人的資源・要素である人間の労働力が、物的資源・要素に該当する労働手段を使って、同じく物的資源・要素に該当する原材料など労働対象の価値を高めていく。これが生産過程で行なわれ、ここで今の言葉で言えば付加価値生産が行なわれ、労働対象の価値が高められていく。こうした意味合いで、この生産過程は別名「価値増殖過程」とであると捉えることもできる。再度確認しておきたいのは、そうした価値を増加・増殖させているのは、物ではなくて、人の働き・労働であるという点である。

ここまでで1-1・2を合わせてまとめていくと、人による労働による生産活動が基礎・基盤となって我々の消費に必要なものが得られているのであって、生産過程で人間による労働のおかげをもって生活必需品等々が生み出され、そのことによって通俗的な表現を用いれば我々は「生きることができ」「生かされている」のである。充溢している空気やふりそそいでくれる太陽光と同様に、人間が行なう有形無形の労働の恩恵によって、価値あるものが生産手段を用いて生産されることによって、我々の生活は維持できているのである。このことはいくら強調しても、強調しすぎることはない。

付随して重要な論点を加えていくと、以上のことは人類の長い歴史を貫く普遍的な事柄である。人類の有史以来、多くの事柄が変化し発展していった。しかしその中で変わらない不変的で普遍的な事柄が、上記示してきたように、労働によって生活必需品等々を生産していかなければならないこと、それを生産していくことで社会が維持・再生産されていくこと、人間の労働いう能力がそれらを担っていること、これらである。有史以来、社会・経済体制・制度は時代によって変化してきたが、そうした変化・流転

の中でも有史以来、上述の事柄は変わらずに貫かれている一本の線の如きものであることが理解されよう。ということは、今日の資本主義制度下でもこれらのことは普遍的に共通していることでもある。ただし、その資本主義制度の下では上記の事柄が、それ以前の制度とは違って、どのような特殊性や特質を帯びて行なわれているのか、これらのことを比較対比的に考察し、そしてまたそれを示し出し得る視点を、労働価値説は持っているわけである。具体的には、資本主義社会では生活必需品等々を生産する際に、労働がどのような状況下に置かれ、どのように組織され編成され、生活必需品等々がどのように供給され、消費に至るまでにどのような形で流通・交換されていくのか、つまり労働によってその制度・体制・社会がどのように維持・再生産されているのか、これらを明確にしていく視点でもある。労働価値説は以下で触れる唯物史観と合わせて、(この点次項以降で必要・関連において簡単に叙述、)かような視点を合わせ持つものでもある。

1-3. 以上の観点から得られる価値の実体

こうした見地に立つとすれば、既述でも若干触れたが、労働による生産があつて消費が可能になっているのであつて、消費が生産を築いて培っているのではない。本来的・根本的には労働によって生産物が生み出され、その後その生産物が交換されて消費されていく。その生産物の交換は、現在の資本主義社会で典型的な特徴として、貨幣による交換つまり売買を通じて、そして後の消費、これらが可能になっている。しかしこの前提には、必ず労働による生産と生産物が存在していなければならないはずであつた。それが存在した上で、貨幣による売買交換と消費が成立するのである。つまり労働による生産と生産物という前提や恩恵が本来的また根本になれば、消費は成り立たないし、ましてや現在の資本主義社会で上記のように典型的に行なわれている貨幣による売買交換すらも成立しはしないのである。これらのことは生産力水準が低い状況、あるいは災害時の品薄の状況などを想定してみれば、今日でも理解されることであろう。(近年の例では、コロナ禍の始まりに、いくらお金があつたところで、マスクが生産され供給されていなければ、マスクの入手はできなかったことを想起されたい。)

このような観点に立ち、労働による生産活動を基礎・基盤に社会を見ていく視点、労働を尊重し重視する見方、つまりは根本的に労働に価値を見ていく視点、これが労働価値説の根底にある観点である。これは誤りとか正解とか言う以前のもので、一つの観点・視点である。まず労働価値説とはこのような見方・観点・視点であることを理解しておきたい。冒頭示した労働価値説の前提となる公理的把握というのは、以上の認識把握からのものである。

そして既述のように、根本的には人間の労働によって、ひいては生産的な活動によって、生活必需品等々が産出され、それによって現在の社会・経済が存続し、維持され、そして再生産されていた。つまりは人間が行なう労働と生産的な活動が根本にあり、それによって社会・経済は支えられているのであつた。労働価値説(労働価値論)と同時にマルクスによって示された唯物史観(史的唯物論)も、この点を特に重視するところである。

となれば、その社会・経済を存続させ維持させている生活必需品等々、それこそがまず重要であり、そこにいわゆる社会的な重要性、また経済的な価値があると言えるのである。それらがないと、我々人間の生活と社会とが成り立たず、存続できないのであるから。ここから、そうした価値ある日常の生活必需品を供給し、生み出していくことができるのは、人間の生産的な活動、つまりは人間の労働、これにこそ重要性や意義が求められるわけである。つまり人間の生活にとって価値ある生活必需品等々を生み出しているのは、人間が行なう生産的な活動、つまりは労働であつたればこそ、価値の根源や源泉あるいはその実体は労働である。と、このように唯物史観や労働価値説は観、捉えているのである⁽³⁾。

これがまた、取りも直さず、唯物史観や労働価値説の意義と特長でもある。

マルクスの労働価値説は、以上のようないわゆる唯物史観で示された生産力・生産関係重視の視点と密接に関わっているのであって、よって労働価値説は唯物史観との関連の上で、上記のように理解し把握していくことが重要と考える。ここから付言すれば、上述のような人間の行なった労働生産物こそ、価値が詰まっており、あるいはまたその労働生産物に価値が凝固され凝縮されている。このような把握と表現も、唯物史観や労働価値説ではなされるところである。

なぜこのような捉え方・把握をするかを改めて問えば、上述の背景と論理からであって、もはや繰り返すまでもないであろう。簡単に言ってしまうれば既述のように、要は分析の視点や重視すべき観点が人間の生産的な活動や人間の労働に置かれ、それによって分析が進められているということである。これは先ほども示したように、間違っている観点とか、誤りがある見方ということではない⁽⁴⁾。観点や視点そして重点の置き方が、そこにあるということである。再度繰り返せば唯物史観や労働価値説は、上記のような視点・観点から、そもそもが人間の生産的な活動や人間の労働に中心軸や価値を見て分析を進めていくものである、ということに集約されよう。

1－4. 社会的・平均的必要労働時間を把握する必要性

このような観点と把握からすれば、当該期においてその社会が（あるいは個人でもよいが）必要となる、彼らにとって価値がある生活必需品等々は、一体どのくらいの労働量で、つまりどのくらいの労働を直接・間接、投下・投入することによって、どの程度産出・生産され得るのか。これが必然的に重要な対象事項となってくる。つまり、1－1・2・3の観点から派生してくる重要な追究対象事項は、当該期において、我々の生活の根幹である生活必需品等々はどのくらいの労働量で生産可能か。どのくらいの労働を投下・投入することによって、我々になくってはならぬ価値ある生活必需品が生産され供給されてくるのか。社会の下部構造と把握され得るその社会の経済構造、それはどの程度の生産力を持っており、具体的にどの程度の生活必需品等々を生み出すことができるのか。我々は社会的にせよ一個人にせよ、どの程度の労働量で生きていけるのか。どの程度の労働量で再生産されていくのか。このような事項となる。

さらにその労働を量的な具体性をもって数値的に把握するとすれば、どうするか。その量的把握には労働時間、それもさらにより具体化していくとなると社会的に平均的必要労働時間、これをもって把握されなければならない、具体化されるとともに上記の追究対象事項は現実の下にいつそう可視化されてくることとなる。

こうした視点と対象からして、労働価値説ではいわゆる価値の具体的な尺度として、生活必需品等々（現代の資本主義体制ではこれは既述のとおり「商品」となって貨幣で売買交換されている）を生み出していく際、それに必要な投下・投入労働量（それも社会的に平均的必要労働時間）に着目して、それをその商品の価値の内実として、また価値の具体的な量としていく、このような商品の価値に関する定義がなされていくのである⁽⁵⁾。これが労働価値説的に把握され提示されてくる価値の実体ともなってくる。そしてこれらの意味するところは、上の理解把握と論理展開から提起されてくるわけである。

2. 労働価値説への批判と反批判

このように労働価値説を示してきたが、その真意云々を理解する・しないに関わらず、労働価値説には数々の批判・反論が以前から投げかけられて現在に至っている。またそれに対する反批判も出され、論争（「価値論争」）となったこともしかりである。ここでは労働価値説のさらなる理解のため、労働価

値説への批判・反論で有名なものをいくつか取り上げて確認してみたい。代表的なものとして以下のものがある。(労働価値説はマルクスによって完成されたようなものであるから、労働価値説への批判・反論はマルクス経済学の批判・反論と重なる面もある。)

2-1. 労働価値説への批判と反批判 ①～⑥

①労働価値説がいう、労働力こそが価値を創出して形成し、拡大させることができるという考え方に對して。労働だけではなく自然そのものも価値創出の一因である。自然は単に与件や前提、また労働対象として存在するのでは決してなく、労働力と自然は完全に対等な関係にある。両者が一体となって価値が形成される。労働価値説は専ら労働力のみを価値形勢の唯一の源泉として、その他の自然や使用価値を捨象し排除し、論理の外に置き、自然と使用価値が持つ意義を正當に評価していない。これでは自然の過小評価、使用価値の過小評価、労働力のみ的重要視となっていき、自然の輕視、自然の無限性という誤謬、そして自然破壊の容認へと、發展してしまう。

②労働価値説は商品の価値を生産に必要な労働の大きさのみで規定し、需要や希少性の問題を価値規定から排除している。これは労働価値説の致命的な欠陥であって、価値を供給側の労働にのみ求め、需要側の人びとの主観的心理作用を無視してしまう。商品の価値規定には商品を受容する人びとの主観的判断が入らざるをえず、これを排除することは不可能だ。

③マルクスの論法は、初めから商品それも労働生産物という性質のものを集めておいて、その後にそれらに共通なものが労働生産物だという一点を主張し、その内実を抽象的人間労働だとしている。この立論は同じ性質を持っているものだけを集めておいて、そこに共通な性質を求めるものであって、立論の出発点からして論理的な方法ではなく、正しいものではない。

④労働価値説の展開上、使用価値は捨象されて把握されるべきはない。使用価値にも、労働と同様、一般に共通する要素を見ることが可能である。②のようにして様々な商品の異質的性質を除去した後でも、さらに一般的使用価値が等しく残るという主張が、マルクスの抽象法と同様の方法でも可能である。したがって、人間労働のみが価値の実体として残留するというのは非論理である。

⑤労働価値説でいう「商品の価値の実体は、その生産における社会的に必要な労働量である」という定義あるいは基本命題は、何ら経験科学的に証明できるものではない。

⑥土地に見られるように、また土地に限らずそれ以外にも、労働生産物でないものが實際現實に価格を持って売買交換されており、これらは一般的なありふれた現象である。こうした労働生産物でないものがなぜ価格を持つのか。土地などは生産されたものではなくて、加えられた投下労働量(社会的平均的必要労働量)もないのであるから、労働価値説では土地などは労働生産物ではなく、いわゆる価値物ではないとされる。しかし實際土地などは現實に価格が付され、そしてその価格にて売買あるいは貸借されている。この一般的にしてありふれた現象を労働価値説では説明できない。論理的な破綻をこれは示している。

こうした批判・反論が労働価値説あるいはマルクス經濟に対して、かつてよりなされてきた。実は筆者・深澤は上記のそれぞれに関して詳しく検討し、その反批判を加えてきた。(①に対しては深澤[2010, 2012]で、②に対しては深澤[2010, 2015]で、③に対しては深澤[2020a, b]で、④に対しては深澤[2020a, b]で、⑤に対しては深澤[2020b]で、⑥に対しては深澤[2020c]で、それぞれ詳しく検討し反批判があるので参考にされたい。)本稿では労働価値説に関する新たな批判として、本稿1の冒頭とも合せた次のものを検討していきたい。

2-2. 労働価値説への批判と反批判 ⑦

⑦本稿の冒頭で示した経済学の辞書やウィキペディアにも、「商品の価値は労働によって規定される」「労働が商品の価値を決める」というくだりがあったが、そうではない。我々が労働するのは、一般的にはそれを生産して金（収入・所得）になるからで、それにいわば価値があるからだ。労働価値説がいうように、労働したから価値があるのではない。逆である。本項ではこれに答えていきたい。

まず本稿1の冒頭で取り上げたような、「商品の価値は労働によって規定される」「労働が商品の価値を決める」とするのが労働価値説だとして、そこだけに極言してしまうのは、妥当ではない。この点に関しては既に読者にはお解りであろう。労働価値説とは本稿で示してきた認識把握から示されるわけであって、労働したから価値があるとか、規定している・決めているとかを説いているものではない。そうではなくて、念のため再確認しておくが、我々の生活にとって価値ある生活必需品等々を生み出すのは労働であって、その労働によって我々の生活にとって価値ある生活必需品等々が生産されてくる。であるから、価値生産と創造の根源や源泉を労働に捉えたわけである。単に労働したから価値が決められる・規定されるなどという労働価値説の認識と説明は、本稿での説明からして妥当なものではなく、まったくの曲解であるとも言える。本稿これまでの説明内容によって、読者には労働価値説の真意を明確に把握されたい。さらに本稿の冒頭で取り上げたような労働価値説の説明では、単にその商品を生産する労働をしたから、その労働によって商品の価値が決められると労働価値説は説いているのだという、このような誤解を与えやすいのである。労働価値説はそうしたものではない点を再度認識・確認されたい。

これを踏まえた上で我々が労働するのは、一般的にはそれを生産して金（収入・所得）になるからで、それに価値があるからだという見解・認識に関して、以下検討していく。確かにそうした考えは、現在一般的な見解・認識、あるいは一般的な感覚であろう。ただ本稿今までの労働価値説の観点から把握し再確認しておきたいのは、そうした見解・認識・感覚には既に金（収入・所得）だけに縛られ、操られてしまっている、という点である。

既述のとおり、現在の資本主義社会では労働し生産されたものが、その後に商品となって貨幣を通じて売買交換されていく。ほとんどのものが貨幣と商品との交換を経て、加えてそれらが営利を目的として行なわれている。それにて利得（金・収入・所得）を手に入れられなければ、自身の生存が危ういようにもなっている。であるからこそ、働く・労働するというわけであって、そうした行動原理がこの世の中（資本主義）の命題だというわけである。その中にどっぷり浸かってしまえば、上記のような感覚になるのも当然であろう。（マルクス経済学ではこうした現象や洗脳された意識を「物神崇拜」としているが。）資本主義社会・経済にあって、金（収入・所得）だけに縛られ操られてしまっている側面が見て取れるというのは、こうした意味内容からである。

これに関して本稿で指摘してきた労働を重視する労働価値説によれば、次のことが言える。逆に、金（収入・所得）にはならないが、必要であり有益な労働行為・活動がある。農業などに典型的に見られる自給的な労働⁽⁶⁾、家事労働、ボランティア的な労働、あるいはまた無償の地域活動、社会貢献活動など、これらが良い例である。それらの労働や働きによって個人や家庭や、また社会・経済が維持されているのであれば、なおのこと必要・重要で有益である。つまり金・収入・所得になる・ならない以前の問題として、労働というのは個人や社会にとって重要なのである。このことは本稿1で労働価値説の観点として、縷々説いてきたとおりである。このように労働によって価値あるものが生産されているのだが、現在の資本主義社会ではそれらのうち、一定にして多くのものがその後に貨幣・商品による売買交換、そしてその際に営利目的、このようになっているため、金（収入・所得）にならないならば、有益なものであっても価値を見出せなくなっているのである。逆に金（収入・所得）になるのであれば、不道德

なものやまた環境を破壊するようなものであっても、それに金銭的・営利的な価値だけを見出して、追求するようになってしまっている。金のために働き、また働かなければならない、あるいは働かされている社会になっている、というのが現状でもあろう。

このように見てくれば、金（収入・所得）になる労働だけに価値を求めるというのは、人間が持つ労働の崇高な意義を下げてしまうものではないだろうか。金（収入・所得）になる労働だけが大切なのではない。それ以外に労働は既述のとおり一般的に重要にして意義があるのであって、それら労働全体によって、繰り返すが、この社会・経済が維持されている。そうした労働全体の中で一部のものが、現在の社会では貨幣・利潤目的となっている。しかしそれだけが重要なのではない。現在の貨幣・利潤目的だけに固執するのではなく、また視点をそのみに絞るのではなく、それ以外の労働の重要性を感知し摂取していくことが必要で重要であろう。

金銭的な尺度とは別に、営利目的以外にも重要な労働、その意義を再確認・再認識するためにも、本稿で述べてきた労働価値説の視点は今日是非とも必要ではないだろうか。こう考えるところである。付随して言えることは、労働をもし金銭的な尺度で計る場合、同一あるいは対等な労働がなされておきながら、そこに（例えば賃金などの）同等な支払いがなされていないとなると、それは不公平ということになる。この点に関しては次項・次節で扱う。

2-3. 労働価値説への批判と反批判 ⑧

労働価値説では、経営的に優れた才腕・能力を発揮した者の事例、あるいは優れた発明をしてそれを基にして財を成した者の成功事例、これらをどう見るか。究極的に労働を直接投下している肉体労働者のみの労働が尊い、こうした立論になるではないか。これらの批判に答えておきたい。

確かに直接的な肉体労働の面だけでなく、経営的に優れた才腕・能力を発揮した者の事例、あるいは優れた発明をしてそれを基にして財を成した者の成功事例はいくらでもある。しかしそうした成功事例は、その優れた才腕や能力だけに着目しているのではないだろうか。そこで見過ごされていることを上述の労働価値説の視点から言えば、例えばそれらの事業のために身を粉にして一生懸命働いてくれた方々が、着目されてないけれども存在したこと、彼らのおかげであったこと、こうした事実である。そうした名もない者などの献身的な労働・働きがなければ、さらには最終的には人間が動いて働いてくれなければ、何も生まれないのである。優れたアイディア等々がいくらあったとしても、誰も動いて働いてくれなければ、それは画餅・机上の空論となるわけである。労働価値説はまずこうした視点で、根源的・究極的にして重要な人間の活動に着目した上での立論展開であると、理解されたい。

究極的にまた労働を直接投下している肉体労働者のみの労働が尊い、こうした立論になるではないか。このような行き急いだ批判に対しても、上述のような労働に価値を置く労働価値説からすれば、肉体労働にせよ、頭脳労働にせよ、労働は等しく尊いのである。肉体面・頭脳面での労働、あるいは最終的な肉体労働や指揮・管理・監督的な面を中心とした労働、これらがある目的達成に関して必要となるならば、それらの労働は必要労働であって、等しく尊いものである。こうした労働の同等性の観点を労働価値説は重視するのであって、目的遂行のために必要であって投下された労働、そこにいわば貴賤を見ることはできない。

このように労働価値説は必要な投下労働に同等性を見ているのであるから、逆に言えば、目的・事業遂行（あるいは上記の言葉では特に「価値増殖過程」）において、まったく何ら関与することなく、徒に営利のみを希求し、さらにまた必要な労働を行なっている者を酷使するもの・ことなどの存在があったとするならば、そこにはいわゆる「搾取」、あるいは社会的・道徳的な非があるとなるのである。こ

これは労働価値説云々以前のことであろうが、特に労働価値説は以下見るように、規範的な意味合いで用いられる場合もあるから、なおのことでもある。この点に関しては先に述べた労働価値説の歴史貫通的な重要項目であり、この現代的意義の具体的展開に関して次節で再論していく。

3. 同一労働＝同一賃金に関して

労働価値説は一種規範的な意味合いを持つこともある。例えば「働かざる者、食うべからず」（この出典に関して、筆者があたった限りで最古のものは、『新約聖書』「テサロケニア人への第2の手紙」第3章 第10節に見られる）、などの箴言はよく知られたものである。こうした見地と関連して「不労所得に対する批判的見地」は、今日でも根強く存在する。またこの後に本稿で触れていく、昨今の現代的な標語（あるいは評語）としても、「同一労働＝同一賃金」が叫ばれている。こうした労働に基く普遍的正当性、そしてまたそれを追求する動き、これらは本文のような労働価値説に基づいた現代的な観点と思考であって、同時に上記の規範的な意味合いから提起される労働価値説の現代的な見解と主張、また労働価値説の現代的な意義と捉えることができる。この労働価値説の今日的な意義の一つである同一労働＝同一賃金を求める動きに関して、以下取り上げながら認識を深めていきたい。

まず何と言っても、この問題を社会的に広め大きくしたのは、非正規雇用の複数の労働者（大学の事務、駅構内の売店の販売業務、郵便外事務）から、正規の雇用者と同一の労働を行なっているのにもかかわらず、賞与・退職金ほかに待遇差があるのはおかしいという訴訟が起こり、最高裁判所が時をほぼ同じくして2020年10月に判決を下したことであった。これらの訴訟内容・判決内容の詳細までは割愛するが、要は「どのような待遇差であれ、その差に合理的な根拠がなければ法律違反」、この点で現在おおよその見解の一致を見ていると考えられる。

要するに、同一労働であれば同一賃金でなければならないという原則が認められたことになる。同一の職場で同じ労働を行なって、それにもかかわらず正当な理由がなく待遇に差があるのは違法であって、その場合は同じ賃金報酬が与えられなければならないというわけである。正規・非正規など雇用の形態などではなくて、そこに行なわれている（本稿でも上記示してきた）労働の同等性・同一性というものが、尺度基準あるいは基本・根本に据えられるべき事項として認識されたわけである。

さて、こうした労働の同等性・同一性を根本に据え、そこに尺度基準を求める観点は、古くは今を遡ること約300年前、アダム・スミス（1723～90年）から遡ると100年前、ウィリアム・ペティ（1623～87年）にその原型が見られる⁽⁷⁾。労働価値説の中でも、投下労働量による等価交換の論理がその原型であるが、その論理はその後有名なところではアダム・スミスを経て、マルクス（1818～83年）の価値形態論につながってくるものである。

このように労働価値説の中で、投下労働量を根底に置き、それを尺度基準として等価交換を展開していく、こうした論理や考えは、今日的にはそれらを基礎に、労働の同等性・同一性を根底において、それを尺度基準として、ならば賃金も同一なるものでなければならない、こうした考え・規範また動きにつながっていると考えられる。労働価値説が今日的意義を持つと筆者が示した所以はこの点にある。

おわりに

労働価値説の批判に戻るが、労働価値説への批判その⑨としてよく散見されるのは、労働価値説は古典学派的なもので、労働が希少にして重要であった古典学派当時とは違って、今日では労働以外の生産要素が重要性を帯びている、のであるから労働価値説は旧来のもので現代的な意義はない。「労働力を生産過程における唯一の希少な資源と仮定する特殊モデル」である、このような見解もある。しかし以

上本稿ここまで考察・再考してくると、労働価値説は旧来のもので現代的な意義はないと筆者には到底考えられない。その逆であって、その今日的意義のいくつかは本稿で示してきたとおりである。労働以外の生産要素も重要であるが、結局それを用いていくのは人間である。加えて、人間労働の根源的な重要性という点は、本稿の1で再考して示してきたとおり、万古不易のことであろう。

古典に学びながら、その現代的な意義を追究していく温故知新、そうした作業を引続き筆者の課題としていきたいと考える次第である⁽⁸⁾。

注

- (1) 金森他 [1998] 1260 ページ。
- (2) ちなみに学術論文では通常「ウィキペディア」が典拠として用いられることはないが、同サイトは調べたいと思った時にまず利用されるという点で社会的影響力が大きいので、本稿ではあえてその文面内容を批判・是正したいがために引用している。同サイトでは、「1870 年代に [中略] 労働価値説は彼ら [ジェボンズ、メンガー、ワルラス] の学説にとって、『労働力を生産過程における唯一の希少な資源と仮定する特殊モデル』として整理され、以後、[中略] 今日に至っている」ともある。こうした理解が、旧来の「近代経済学」的な一般的な理解というところであろうか。果たしてそうした理解が妥当であるのかどうか、本稿では「おわりに」において再確認していくこととなる。
- (3) マルクスの『資本論』には、「価値を形成する実体、[中略] すなわち労働」、「諸価値の実体をなす労働」(Marx [1867-1890] Band 23. S. 53. 和訳 66 ページ)。あるいはまた「商品の価値は、人間労働自体を、人間労働一般の支出を、表わしている。」(ibid. S. 59. 和訳 75 ページ。)等々、このような価値の実体と労働に関する表現が多々用いられているが、それは本文のような意味合いで捉えると解りやすいであろう。この点に関しては、深澤 [2020a] を参照。
- (4) これに関しては、深澤 [2020b] にて詳しく示してあるので参照されたい。
- (5) マルクスの『資本論』には、「どのようにしてその価値の大きさははかられるのか？ それに含まれている『価値を形成する実体』、すなわち労働の、分量によってである。」(a. a. O. S. 59. 和訳 66 ページ。)'価値としては、すべての商品は、一定量の凝固した労働時間に他ならない。」(ibid. S. 54. 和訳 67 ページ。)等々の表現をもって、価値に関して労働量(時間)での定義がなされているが、それは本文のような意味合いで捉えると解りやすい。この点に関しては、深澤 [2020a] を参照。
- (6) 農業による半自給的な労働を通じた実践活動を基にした考察に関しては、特に深澤 [2022] を参照。
- (7) この点に関しては、深澤 [2015] にて詳しく示してあるので参照されたい。
- (8) 本稿では労働価値説の意義ばかり説いてきたが、その反面もしっかりと斟酌し考察していくことが重要であろう。そこで本稿本文 2-1 の②の批判を斟酌して、労働価値説の捉え方や主張だと生産者側優位の観点一辺倒から、消費者側の需要軽視のきらいは出てくる。こうした点は注意すべきである。

参考文献

- 金森久雄・荒憲治郎・森口親司編集 [1998] 『有斐閣経済辞典』(第3版) 有斐閣。
- 深澤竜人 [2010] 「労働価値説(投下労働量分析)と自然・環境・使用価値との関係の検討—イムラー『経済学は自然をどうとらえてきたのか』の労働価値説批判への反論—」『山梨学院大学経営情報学論集』第16号。
- [2012] 「投下労働量分析の発展と展開」(明治大学2011年度博士学位請求論文) 明治大学図書館。
- [2015] 「労働価値説の源流の研究」『明治大学教職課程年報』No. 37。
- [2016a] 「フィジオクラシー(重農主義)の現代的意義の考察—F. ケネー『経済表』以前の著作から検討—」『えんとりびい』(エントロピー学会誌) 第77号。
- [2016b] 「1800年代前半の価値論の展開について」『明治大学教職課程年報』No. 38。
- [2016c] 「【講義・研究ノート】投下労働量分析と唯物史観の統合」『山梨学院大学経営情報学論集』第22号。
- [2017a] 「マルクスのシーニア批判—マルクス経済学と「限界革命」I—」『山梨学院大学現代ビジネス研究』第10号。
- [2017b] 「二つの経済学の相克と経済学学習の指針—マルクス経済学と「限界革命」II—」『大学改革と生涯学習(山梨学院生涯学習センター紀要)』第22号。
- [2017c] 「1840年代におけるマルクス・エンゲルスの価値論の展開について」『山梨学院大学経営情報学論集』第23号。
- [2018a] 「オーストリア学派の価値論の考察—マルクス経済学と「限界革命」III—」『山梨学院大学経営情報学論集』第24号。
- [2018b] 「限界効用価値説の展開と労働価値説との対比—マルクス経済学と「限界革命」IV—」『山梨学院大学現代ビジネス研究』第11号。
- [2018c] 「【翻訳】経済的価値の本源と主要法則について(1)」『山梨学院大学経営情報学論集』第24号。
- [2018d] 「【書評】価値と資本(資本主義の理論的基盤) 飯田和人著 [桜井書店、2017年]」『季刊 経済理論』(経済理論学会編) 第55巻、第2号(2018年7月)。
- [2018e] 「抽象的労働説の検討」『山梨学院大学現代ビジネス研究』第11号。
- [2020a] 「労働価値説の再考—1920年代の価値論争を題材にして—」『山梨学院大学経営学論集』第1号。

- [2020b] 「1920 年代後半の価値論争の再考」『明治大学教職課程年報』No. 42。
- [2020c] 「労働価値説と地代に関して」『大学改革と生涯学習（山梨学院生涯学習センター紀要）』第 24 号。
- [2022] 「半自給農の思想・意識－「労働価値説」・「自然との物質代謝」と合わせて－」『えんとりびい』（エントロピー学会誌）第 83 号。

Karl Marx [1867-1890] *Das Kapital, Kritik der politischen Ökonomie*, in *Karl Marx-Friedrich Engels Werke*, Band 23-25, Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED, Berlin, Dietz Verlag, 1962-64.（本稿では資本論翻訳委員会訳 [1982-89]『資本論』新日本出版社の訳を用いた。）